

# 町長発！ “がんばる” トーク

町長 上川 元張



5月11日に「100万人のクラシックライブ」が若桜駅舎で開催されました。これは、日常に音楽があふれるまちを目指し、年間100万人に音楽の感動をと、全国各地で展開されている演奏活動です。当日は、伊藤日菜子さんのバイオリン、竹内麻優さんの電子ピアノにより、音楽の世界旅行といういで、ドボルザーク、ブラームス、モーツアルトなどの楽曲と、最後は日本のおぼろ月夜などの童謡が情感豊かに演奏されました。

会場規模を考慮し、学園生へのチラシとP告知のみのPRでしたが、50人近くの観客が集まりました。町内では聴く機会の少ないクラシック演奏ですが、説明を交え、奏者の息使いが聞こえる至近距離での演奏で、会場は一体感に包まれました。また、共催のカシオ計算機(株)のデジタル技術を駆使した「ミュージックタペストリー」により、演奏のニュアンスが刻々と花などの映像に変換され、一枚の絵が完成する様子も楽しみました。

この活動を主宰する財団の代表理事 蓑田秀策さんが、ご夫婦で来町されました。蓑田さんは、世界最大級の外資系金融機関のトップを務められ、退任後に財団を創設して社会貢献活動を始められました。その理由を次のように語っておられます。

蓑田さんが社会人となったのは高度経済成長期中盤の1970年代。当時は国を挙げて豊かさを追求し、同時に個人主義が入ってきた時代でした。子供部屋を与えられ、ラジオの深夜放送を聞きながら受験勉強した世代です。そして、経済の絶頂期を経験した後、90年代初頭のバブル崩壊。これを機に、日本はどんどん崩れていきます。個人の孤立が進み、人と人のつながりが希薄化し、コミュニティは崩壊。2000年代にはさらに加速していきます。

「貧しかった、でもつながりがあった」時代から「豊かになった、でもバラバラ」の時代へ社会は大きく変質し、蓑田さんは、「私達は国の造り方を間違えた」と自責の念にかられます。こうした問題意識から、「音楽を通じて人と人とが緩やかにつながる社会」を造ろうと財団を創設されたのです。最近では、コロナ禍で一層拡大した格差問題に心を痛め、貧困家庭の子どもたちに音楽鑑賞の機会を届ける取組にも力を入れておられます。

蓑田さんが指摘する日本社会の変質は、少子化をはじめ現代の様々な社会問題の根源であると言っても過言ではありません。私も、蓑田さんの思いに深く共感し、その活動に未来への希望を感じます。今回のご縁を、今後も大切にしたいと思います。